
U S O よね . . .

Seabolt

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

USOよね・・・

【Nコード】

N2818Z

【作者名】

Seabolt

【あらすじ】

突然、お見合いをしるといわれたのぞみ・・・そのお見合いも既に結婚が前提・・・しかも、相手は・・・

「はゝ．．．」

溜息をしかでなかった。なぜ私が？．．．しかも．．．この年で．．．まだ高校生なのに．．．．．
そう自問自答する彼女の名は岡田のぞみ、彼女にとって今回のことは寝耳に水、天国から地獄とはこのことだった。ただベットの上でただ呆然とし、何度もため息については、ついさっきのことを思い出していた。

「えっ！．．．！お見合い！？．．．どういうこと？」

家に帰ったのぞみはは思わず大声を上げてしまった。のぞみにとって．．．この日、天国と地獄がいつぺんにやって来た。それは2学期が始まってすぐのことだった。

まず最初にやってきたのは天国だった。実はこの日のぞみは中学からの同級生の島田雄二しまたゆうじから学校のチャペルの裏に呼びだされた。そこへ行くと、まだ日に焼けて顔は黒く頭はようやくスポーツ刈くらいまで伸びたすっとした顔立ちをした島田雄二が待っていた。

彼は甲子園へは行けなかったが、野球部のエースで四番、しかも頭もいいと学内でも結構人気のあった。

「島田君、どうしたの？こんなところに呼んで。」

そう話しているのぞみ自体、呼び出された時点で、告白されると言う期待で胸が一杯だった。そして、島田はのぞみの予想通りの話をしてきた。

「岡田！！！！おれ・・・ずっとお前のことが好きだった。そして、今も・・・」

目の前で起こっている夢にまで見ていた光景にうっとりとしているのぞみだった。のぞみとしても島田の事が嫌いなわけではなく、答えはむしろYESと即答したいところだったがここはぐっと我慢した、しかし、島田の最後の一言でのぞみは肩透かしを食らった感じになった。それは、のぞみが近づいて手をとろうとした時だった。

「明日、お前の気持ちを教えてくれ！！」

「えっ？」

「明日、ここだな！！」

のぞみが驚いている間に島田は、さっさとこのぞみから離れ去って行った。なんなのよ！！！！と思いつつも気分は最高の状態だった。

そんな気分で帰宅したのぞみに悲劇は襲い掛かった。それは、家に帰ったのぞみを父が呼び止めたことから始まった。今思えば、大體ごく普通のサラリーマンである父は、こんな時間に家にいること自体珍しいと言いかおかしなことであった。

「のぞみ・・・ちょっといいか？」

珍しいなあゝのぞみはそう思いながら、リビングに入ると両親が目の前に正座して座っていた。しかも真剣な顔をして・・・これってどういうこと？ひょっとして、私に就職しろということ？これでもれっきとした受験生ののぞみ・・・しかも・・・私立だけ進学校である城山高校の・・・それともリストラにあつて学費がきつくなつたの？そう思っているとお父さんが話しかけてきた。

「まあ・・・座りなさい・・・」

言われた通りに両親の前に、しかも正座で座ると・・・二人の雰囲気・・・やはりおかしい・・・こ・・・これは、やはり、リストラされたのお父さん？そう思っていたのぞみの予想だになかった言葉が父の口から飛び出してきた。

「のぞみ、来週の日曜日にお見合いが決まった。」

「えっっ！！お見合い！？・・・どういうこと？」

私は思わず大声を上げてしまった。

「だから、来週の日曜日にお見合いが決まった。」

すまなそうな顔で話している父とは対照的に横で母はにこやかな顔をして頷いていた。父の言動に困惑するのぞみ　えっ？い・
・今・・・なんて、と父を見ると顔はマジだ・・・ど・どどどいうこと？そ・・そうよ・・これはきつと冗談よ・・そう・・絶対そうよ・・

「ジョー！！・・・冗談でしょ？お父さんたら〜ねえ〜またまた・・・そうでしょ？」

父の表情が少しやわらぎ、いつものおちゃらけた雰囲気を出してきた・・・やっぱりそうでしょう。おとうさん・・・

「そう・・冗談・・・」

少しふざけたように言おうとした時を母が制した。

「あなた！！」

えっ？お母さんまで・・・どういうことよ。再び父の表情が険しくなった。そして、母の表情も厳しくなってきた。・・・お父さん、お母さんまで、お互いの顔を見合せて頷いちゃって、しかも・・・真顔でのぞみのほうを向いた。

「本当だ・・」

嘘――！！のぞみは一瞬にして思考は完全停止してしまった。何言ってるのよーおとうさん・・・うそでしょう？しかし、本当だという言葉が何度も繰り返し頭の中を駆け巡る・・・どういうこと？のぞみはしばらく呆然とした。

「う・・・そ・・・よ・・・ね」

「うそじゃないわよ。」

母の言葉は容赦なくめぐみに止めを刺した。

「うそでしょ・・・わたし・・・受験生よ」

「のぞみー頼むから・・・」

そう言った父の方を見ると土下座してるのに見て驚いた。・・・ちよつと何してんのよ・・・そう思っていると母まで土下座をしはじめた

「やめてよーおとうさん・・・お母さん・・・」

めぐみの言葉にも土下座をやめない二人、

そもそも原因は、のぞみの父にあった。彼の学生時代　父が通っていた大学の親友である藤堂とうどうとある飲み会の席で将来自分達の子供を結婚させると約束をしてしまったことからだった。あれから数年が経ち、いい加減な父はそのことを完全に忘れていた。しかし、

ある日のこと、仕事上で藤堂と会うことになった。そして、藤堂の開口一番は「あの約束、覚えているだろうな。」だった。父は、最初は、酒の席でと話をかわそうとしたが、藤堂は本気だった。やむなく話を進めることに・・・と私の不幸の元凶を話した父の言葉にのぞみは噛み付いた。

「ちょっと待つて!!この話って・・・すでに結婚が前提なの?」

あわわと再び土下座をする父は、何度も頭を上げ下げしながら

「すまない。のぞみ、本当にすまない。お父さんを許してくれ!!」

「いやよ!!、なぜ!!いきなり結婚なの!??」

「本当にすまない。」

とうとう父は土下座をしたまま、頭を床に当て、私のほうへ顔をあげることにすらしなくなった。ん?と母を見るとにこやかな顔をしてのぞみを見ている。

「いいじゃない・・・のぞみ・・・行き先決まって。」

「ちょっとお母さん!!な・・・なんてこと!!」

「彼氏いるの?」

「な・・・母さん!!!!」

「いないのわよね。そんな男勝りじゃ・・・」

「ちょ・・・ちょっと・・・」

「丁度よかったじゃない・・・」

母の容赦ない言葉はのぞみの心をジャックナイフでズタボロにした。するとその横で土下座し続ける父の侘しい声が響いてきた。

「のぞみ・・・たのむ・・・」

父の方を見ると土下座して髪の毛の薄くなった頭を床に擦り付けている姿が哀れでしうがなくなってきた。おとうさんも乗り気じゃないのに・・・ここまでするなんて・・・のぞみは、ため息交じりに返事をした。

「わかったわ・・・」

そして、ガクツと肩をおとし、うつむき床の継ぎ目を私はじっと見ていた。

そんな・・・酒の席のことを・・・

はあ・・・なんて不幸な少女なの私は・・・そう思っていると父がおもむろに顔をあげた。

「のぞみ・・・これ・・・」

のぞみは父を見るとすまなそうな顔をし差し出した目の前のファイルを見た。そのファイルはかすかに揺れているのがのぞみにもわかった。そして、何度もファイルと父の顔を交互に見た。

「これは？」

その言葉にびくつとする父

しばらく黙っている・・・

「これは？」

もう一度聞くと父は目を閉じふうとため息を付いて頷き、そして覚悟を決めたかのようにこう語った。
しかしその声は徐々に声が小さくなる父親・・・そして、お見合い写真を震える手でのぞみに手渡した。

「見合い相手の写真だ・・・相手の名前は、とつとつひかる藤堂光・・・」

藤堂光その名前はのぞみにとって、聞き覚えのある名前だった。そう彼は彼女が通う高校では知らないものはいない有名人だった。・・・しかし、その写真を見て愕然とした・・・おかつは頭のデブ・・・センスのないまるく赤いふちをしたメガネをして・・・それになに、この意味のない無精ひげ・・・一瞬期待していたのぞみにとつては、悪夢そのものだった。のぞみが呆れて目をそらし父の方を向くとうつぶいて目をあわそうとせず小さな声でぼそと

「28さい」

のぞみは目を見張って、もう一度の写真を見た。2・・・28歳って私より10歳も年上ってどう見てもこの人28に見えない・・・しばらく、その写真をじつと見ていたというか固まっていたのぞみ・・・やがて・・・手が震えだした。

「のぞみ？」

かすかに聞こえる母の声、どうしよう振るえが止まらない・・・

「うそ・・・よ・・・ね？」

私はお見合い写真がぽとりと落とした。父は、その音に気付き顔を上げた。それに気付き私が父の方を見るとさっと頭を下げ土下座の状態に戻った。

「すまん・・・」

・・・

・・・

・・・

かなりの沈黙の後、

「あゝ!!!!!!!!!!」

のぞみの心からの叫び声に驚き両親は、思わず抱き合っていた。

どうしよう・・・

本当に娘の幸せを考えてるの？

はあゝ・・・・・・・・とため息をついて席を立った。

「どこに行くの」

母の一言に思わず両親を睨むと両親は抱き合ったままびくつとなっていた。

「寝る」

部屋に戻ったのぞみは、お見合い写真をゴミ箱のほうへ投げた。しかし、その軌道は大きく外れ、壁に直撃、偶然に壁にもたれ掛け写真がのぞみのほうに向けパカリと開いた。その写真を見て思わずそれを閉じた。のぞみはベットに倒れこんだ。なにが藤堂光よ！！そう思っているとふと同じ高校に通う藤堂の顔が浮かんだ。

藤堂光、藤堂グループの御曹司、学校中の女子が憧れるバリバリのイケメン男子で御曹司とあって毎朝高級車でご登校。そんな彼にのぞみも憧れていた一人だった・・・・でも、身分が違い過ぎる。そして、彼には、立派なご令嬢の彼女、音羽えり（おとわえり）がいる。しかもその彼女とは幼馴染ときている。どこにも入る隙もないし、うわさでは、ちょっかいを出したら、音羽さんに相当いじめられるって聞いていた。だからのぞみにとっては雲の上の存在の彼女だった。いくら同じ名前でも・・・・と思い再びのお見合いの写真を見たそして、思わずその写真をゴミ箱へ投げ捨てた。

ベットの上で膝を抱えるのぞみ。横を見ると鏡に映る自分の姿が

目に入ってきた。ショートカットのヘアにごく平凡な顔立ち空手を
しているせいか、どちらかと言えば男の子っぽいなんて不幸なん
だろう……。やっぱりあのおかっぱデブとは、違いすぎる……。
いかなんとかしないと……。うーん……。何か忘れているような。
……。そうだ……。今日告白されたんだってっけ……。今度は
島田雄二の顔が浮かんだ。明日返事しないと……。ん？……。こ
の見合い壊すの手伝ってくれるかな？。あくどうしよう……。眠れ
ない……。

こうして、のぞみの眠れない夜をすごした。

藤堂は、さっき父親から渡されたもう一度お見合いの写真を見た・
・そして、思わずゴミ箱に投げ捨てベツトに倒れこんだ。親父の奴
全く一体何を考えてるんだ？・・これが藤堂が最初に思ったこと
だった・・

実は同じことが藤堂家でも起こっていた。

それはちよつと前のことだった。呼び出されリビングに出てきた藤
堂は父の言葉に我が耳を疑った。

「来週の日曜日に婚約者と会うことになった。」

「ちよつと待て！！婚約者って！！どいうこだ！！」

ダーン！！と机を思いつきり叩くと同時に藤堂は叫んだ。

「親友との約束でな、まあ・・いきなり結婚という訳にいかんから、
とりあえずお見合い形式で顔をあわせることにな」

「約束って、俺何も聞いてないぞ！！」

「やかましい！！」

父親はそう怒鳴り、机を叩いた。そして、フンと鼻息を荒くして、

「光！！もう決まったことだ！！それとも、わしの顔を潰す気か！
！」

立ち尽くしぐつと拳に力が入る藤堂、親父の奴！！だいたいこうなると親父は誰の言うことも聞かなくなるということを息子である藤堂自身が一番知っていた。

「けど・・・」

藤堂の言葉を見無視する親父は腕組みをして藤堂を睨んだ

「学校でも良い噂きかんのだが」

「なんのことだ。」

「この前の件だ・・・」

「あれは・・・」

それは、夏休みの前のある日のこと、藤堂に自転車であつた奴がいた。そいつの両親は、藤堂の父の知り合いだった。両親は学校を辞めさせないでくれと父にまでお願いしに来ていた。しかし、藤堂のせいでその彼は10日もしないうちに学校を去ることになった。実のところ藤堂はその彼を許し、取り巻き達には手を出さず今まで言っていたのだった。しかし、藤堂に逆らったら学校を辞めさせられる・・・そういう噂が先行していった。そして結局その彼は何もおきないまま噂に負けて学校を去った。あのことをうらんでいるのか親父は？そう思う藤堂に父親は追い討ちを掛けた。

「そろそろ落ち着いたらどうだ。」

「それとこれとは全く話が違つたろうが！！」

そんな姿を見ていた親父は、”ほれ”と言わんばかりにお見合い写真を藤堂の前に出した。

「？」

目の前に置かれた見合い写真を見て、いやな予感がした藤堂……手にした見合い写真を開こうとした時、父がこういった。

「相手だ。岡田のぞみさん28歳」

その言葉にちよつと待て今なんていった？確か28歳って言ったよな？そう思つて父親を睨んだ。

「何睨んでんだ！！お前は年上が好きだったろ？」

ぐつと堪える藤堂、幼いときに母を早くなくした彼の初恋の人は身の回りの世話をしてくれた家政婦だった。しかし、そんなことは藤堂にとつて既に過去のことだった。何をいまさら 写真を開いて見た。その瞬間、目はこれでもかと言わんばかりに開き顔は硬直した。そして、わが目を疑った。

「……………（声が出ない）」

な……なんだ？この写真？親父本気か？どう見ても40過ぎのおばちゃんじゃねえか？しかも、下手なというか？なんていう化粧の仕方だ？そう思つたらただ震えて……父親を睨んだ。

「なんだその目は……」

そこには、どう見ても少し太めのおばさんの姿が映っていた。

「……………」

「何か文句でもあるのか？」

「……………」

藤堂は無言で、部屋を後にした。

「今度の日曜日は絶対にあわせるからな！！！」

ベットに横になっている藤堂は、岡田のぞみ・か・そう思いながら……悩んでいた。ふと、幼馴染の音羽エリの顔がよぎった。学校では彼女として周りに公認されているが実のところがどうも合わない。藤堂自身は思っていた。あの性格からしてエリには頼めない……というか親父の奴すでに手を回してるかもしれない……ふと、音羽の姉、音羽静の顔が浮かんだ。しず姉えには迷惑はかけられない……どうしたらいいんだ？

こうして藤堂も眠れぬ夜をすごした。

さいあく・・・1

この日、のぞみは最悪の目覚めを迎えた。それは、ほとんど眠ることが出来ず、うつらうつらと眠りそうになった瞬間にけたたましく鳴り響く目覚ましに叩き起こされたことによる究極の睡魔と体のだるさ。それは2度寝をして起きた後に訪れるとてつもない眠りと体のだるさの非ではないくらいつらいものとなった。何とか起き上がったのぞみだったが未だに解決の糸口は見えず頭の中は混乱したままだった。ただ今日、島田に会うこと、それがのぞみの唯一の希望の光であった。しかし、彼女の悲劇はこれだけでなかった。この後、電車に乗り遅れ、しかも次の電車は満員電車。とにかくついていなかった。

ようやく校門までたどり着いたのぞみは睡魔に襲われ朦朧とする意識の中、道路の真ん中を歩いていた。その頃一台の高級車が校門を通過して彼女の後ろに迫っていた。そして、その車はのぞみの後ろまで迫りクラクションを鳴らし始めた。しかし、のぼみはそのことに気付かず漫然とあるいていた。普通なら誰かがのぞみに声をかけるのだがその車を見て誰も動けなかった。そうその車の主は藤堂だった。

一方、車でうつらうつら藤堂はそのクラクションで目を覚ました。

「どうした？」

運転手がクラクションを鳴らすが目の前にはふらふらと歩くのぞみの姿がそこにあった。しかも、何度クラクションを鳴らしても、全く反応がない。いい加減に運転手も苛立ちクラクションの回数が増えてきた。

「なんなんだ、あの子は？ワザとか？」

目の前をふらふら歩く少女を見た藤堂 なんなんだこいつ？
どういうつもりだ？ そう思いつつも目の前の様子を見ると、
クラクシヨンに一向に気付く気配もなくただ歩いている。これでは
埒が明かないそう思った藤堂は運転手の肩を叩いた。

「いい、ここで降りる。」

「えっ？でも」

「いいから止めろ」

車から降りた藤堂はのぞみに向かって歩いて行き腕をとった。

「おい」

腕を取られたのぞみはえっ？一体何なの？ただでさえ回らない頭に
突如体をゆすられ、ある種のパニック状態になっていた。もう・・・
なんなのよ！！そう思っているところへ再び藤堂が声をかけた。

「おい！！！」

「なんなのよ！！一体！！！」

のぞみが振り返り顔を上げるとそこには藤堂の顔があった。しまつ
た？何故？藤堂さんがここにいるの？のぞみはそのまま固まってし
まった。一方、藤堂は振り向いたのぞみが目の前に飛び込んできて、
しかもその真っ赤でかすかに涙を浮かべている目が自分をしたから見
つめる姿に言葉を失った。

「あっ・・・」

しばらく見つめう二人・・・その様子を見ていたギャラリーからヒソヒソと声がしてきた。

その声に気付いた藤堂は車の方を指差した。

「よく見る。」

のぞみが指差されて方を見るとそこには一台の車があった。運転席からはハンドルを抱えてのぞみを睨んでいる運転手の姿が確認できた。やばーやつちゃった　震える指で車をさしたのぞみは、視線を藤堂の方に向けた

「ひょっとして・・・」

「そう・・・」

少し険しい顔をした藤堂がコクリとうなずいた。

「私が邪魔を・・・」

「そう・・・校門から・・・」

藤堂は、道端までのぞみの手を引いて歩いた。

「ごめんなさい。本当にワザとじゃないんです。」

まずい・・・怒鳴りつけられる・・・どうしよう

そう思いのぞ

みはひたすら藤堂に頭を下げ謝った。それはこの間の事件の時は、藤堂もマジになって怒鳴り散らしていたからだった。しかし、このときは何かが違った。車が通れるとこを間でのぞみをつれてきた藤堂は掴んでいた手を離した。

「もういいから行け！」

「ごめんなさい。」

何回も頭を下げ謝るのぞみ

「わかったから、行け。」

「ありがとうございます。」

助かった・・・そう思いのぞみはそそくさと逃げて行った。

のぞみの後姿を見送る藤堂は、しばらくして、さっきまで握っていた手をみた。なぜ？俺は怒らなかつたんだ？そして、人波の中に消えていくのぞみの姿を目で追った。そんな時だった。ふと小さい頃を思い出した。ひかるちゃん偉いね！そう言つて藤

堂の額にキスをする少女も姿・・・あの時は、その少女の妹を怒るのを我慢したときだった。気が付くと自分の額に手を当てていた。

いかん・・・俺は何を・・・やはり昨日のことで眠れなかつたせいかな・・・藤堂は頭を振った。そして、運転手に

「ここから歩くから・・・」

そうついい残し、教室に向かった。

さいあく・・・2

あゝ！！さいあくゝ！！朝からなんてついてないの　のぞみ
は頭を抱え自分の席にいた。やってしまった・・・手を引かれ
一瞬で目の前に現れた藤堂の顔が浮かんできた。こういう時に限つ
てのぞみの頭には悪いことしか思いつかなかった。ひょっとして・
学校を追い出されるかも・・・ということはすぐ結婚？いやだゝ！
！・・・その瞬間、さっきまで浮かんでいた藤堂の顔が思い出したく
もない顔に変化した、そうおかつば頭をした意味のない無精ひげを
生やしたデブのおっさんの顔が・・・思わず頭を左右に振り、そ
して、そのまま机に伏せた。そんな時のぞみの後ろからそっと近づ
く二人の姿があった。親友の岩崎裕子と大山美由紀だった。

「のぞみゝ見たわよゝ」

「うるさい・・・」

のぞみは、ふと顔を上げ・・・はあゝとため息をつきつつむいた。
その肩に手を掛けた岩崎

「どうしたの？元氣ないね。」

「いや。別に・・・」

目の前に立つ二人を見たのぞみ・・・再びため息を付いた。それを見
ていた大山はそつと後ろに回った。

「本当？」

そう言つて、のぞみの首を絞めた。

「ぐあゝ!!」

いきなり首を絞められたのぞみはのけぞつた、その状態で大山は質問をした。

「よく、あんなことできたわね」

「は・・・はなして・・・」

のぞみは、大山の手を軽く叩いた。そして、ようやく首を開放した大山の前で首を押さえしばらく咳き込んだ。ふうとため息を付いて二人を見た。

「あんなことつて？」

のぞみの言葉に目が点になる二人・・・

「ちよつと!!大丈夫、のぞみ!!」

今度は岩崎がのぞみの両肩を持つて前後に激しくゆすつた。その揺れにあわせ首が前後するのぞみは両手で岩崎の肩を持ってゆするのを止めた。

「裕子、だからなんなのよ!!」

「だから、今朝のことよ・・・」

「今朝つて？」

「藤堂さんの件よ、」

「あ・・・あれね・・・」

「あれねって、のぞみが追い出されるって、もう学校中大騒ぎよ！
！」

のぞみは、二人を交互に見て、溜息をついた。このまま追い出されたら・・・ふとさっきの不気味な顔がのぞみの頭をよぎった。あゝ！！と叫びながら、頭を数度横に振っているを見て、心配する二人

「のぞみ・・・大丈夫」

「とにかく、藤堂さんに謝りに行きましょう！！！！ね」

そう言つて大山がのぞみを手を引いた時、

「ほつとしてよ、それどころじゃないのよ。あゝ！！もう終わりよ！！！」

そう言つてのぞみはその手を振りほどき、頭を抱え込んで再び机に伏せた。この不可解な行動に、おろおろする二人だったが、ある人物が目に入って思わすのぞみから離れた。

机に伏せていたのぞみは、フト暗くなったのに気付いた。どうしたんだろう、ひよつとして眠ってしまったの？そう思つて見上げるとそこには、音羽えりとその仲間が立っていた。頭が混乱しているのぞみには、何故彼女がここに来たかが理解できずに・・・音羽とその愉快的仲間達だ・・・ただそう思っていた。ふと見ると岩崎と

大山の姿がなかった。どこ行っただのとあたりをキョロキョロしていると教室の片隅に二人が逃げていたを見つけた。あの二人……そう思っていたら、目の前で腕を組んで立っている音羽がのぞみを睨み声をかけてきた。

「ちよつと!!あなた」

そう言われたのぞみは、辺りを見回して音羽の方を向いた。そして、のぞみは自分を指差し聞き返した。

「ひよつとして?」

「あなた以外に誰がいるの?」

えっ?何で私なの?そう驚いてるのぞみに音羽は話を続けた。

「あなたに警告しに来たの」

「警告って?」

どういうこと?のぞみは不思議そうに首をかしげた。その行動を見て音羽は眉間にしわを寄せのぞみを睨んだ。

「そう……あなた……自覚なさそうね」

「なにを?」

「本当に……しらばっくれて!」

「えっ?」

「藤堂さんの車が通るのを邪魔したでしょう!!!」

音羽の声のトーンが徐々に上がってきた。のぞみは音羽の声に押され座ったまま少しのけぞった。その時、のぞみを再び睡魔が襲ってきた。そして、音羽の前で大あくびをした

「ただ、眠たかっただけなの。うあああ」

その顔を見てあきれた音羽は、一度横を向いて息をふつと吐いた・

・

「まあ、今日は見逃したげるわ・ふん」

そう言い残して音羽たちは教室を去って行った。

しばらくして、近寄ってきた岩崎と大山・

「なに・・・あれ・・・」

「なに・・・って、あんだ達、」

のぞみ急にキョロリ、キョロリと二人を見て

「えっ・・・どうしたの？急に元気出して・・・」

「あなたたち・・・私を見捨てて逃げたでしょう？お仕置きよ」

さいあく・・・3

頬杖を突いて席に座っている藤堂は、さっき手を引つ張った時、振り返ってきた彼女の顔が思い浮かんだ。そんな時、俺どうしたんだ？何故あいつの顔が気になるんだ？そう思っていると横から聞きなれた声が耳に飛び込んできた。

「よう。藤堂」

そう言つてポンと肩を叩いた小宮真、そして、井上豊は笑いながら鼻しけてきた。

「どうしたんだ。藤堂。今朝のあれ。」

藤堂は頬杖を着いたまま二人から目をそらしたため息混じりに声を漏らした。

「あゝあれか・・・」

元気ののない藤道に二人は顔を見合わせた。そして、井上が藤堂に肩を組んで

「いつもならもつと怒つてたろう。」

「そうか？」

力なく答える藤堂・・・

「そういえば・・・元気ないな・・・どうした？」

小宮が藤堂の顔を見て、聞いてきた。

「いや・・・なんでもない。」

味気ない返事に井上と小宮は顔を見合わせ、首をかしげた。そこへ音羽が教室に入ってきた。

「ひかる
光」

「おっ・・・彼女のお出ましだ・・・」

藤堂は、ちらりと音羽に目をやり、ふうくとため息を付いた。

「どうしたの。？」

音羽は、不思議そうに見て、藤堂の前に座る。

「なんでもない・・・」

そついうと藤堂は音羽から目をそらした。

小宮と井上の方を見た音羽は、藤堂を指差し

「？」

二人は、両手を挙げ、わからないそぶりを見せた。

「まっ・・・いつか・・・今朝の見たわよ」

「何を？」

「あれか？」

まともに返事をしない藤堂に

「どうしたの。本当に」

「なんでもない・・・」

「そう？・・・ところで、今週の日曜日あいてる？」

音羽が聞くと藤堂は、さらにため息をついて

「その日は、用事がある。」

「あっそう・・・じゃあ今度ね・・・」

そう言って音羽は立ち上がり小宮と井上に

「どうしたの」

「朝からあのまま・・・俺達にもわからん。」

「そう」

音羽は教室を後にした。

昼休み、藤堂は、礼拝堂の裏にあるベンチに腰掛けていた。この場所は藤堂のお気に入り場所で一人でいることが多かった。藤堂は悩んでいた・・・親父の奴・・・一体何を考えてるんだ？なぜ、今なんだ？そこへのぞみが一人で歩いて来るのが目に入った。あの女、今朝の・・・と気付いた藤堂はその様子を見ていた。

のぞみは昼休みに入ってすぐに、昨日島田と会った場所へ向かった。昼休みよね。確か　そう思いしばらく携帯の時計を見ながら待っていた。　遅い・・・ひよつとして昨日のはうそなの？それとも今朝のことで・・・あつ来た　と目の前に島田の姿を確認した。

「岡田さん・・・」

島田が声をかけて近づいてくる様子を見て少しもじもじするのぞみ　来てくれたってことは、　のぞみの前に来た島田を見て少しうつむいた。

「あの・・・」

のぞみが決心して、話そうとした時だった。島田の様子がおかしいのに気付いた。それは目を大きく見開いて、のぞみの後ろを見ていた。

あれ〜どうしたんだろう？

「岡田さん・・・」

「はい・・・」

そう答えたのぞみの肩に誰かの腕がずしつと乗った。その衝撃に驚いて振り向くとそこには藤堂が立っていた。

「と・・・藤堂さん？」

その声にチラツとのぞみを見た藤堂は視線をすぐに島田の方へ向けた。何故藤堂さんがここにいるの？のぞみがそう思っていると藤堂が島田に話しかけた。

「島田・・・この娘と話があるんだけど、はずしてくれないか？」

「え？けど・・・」

しばらく固まる島田・・・島田君逃げないでと祈るのぞみを無視して、島田に睨む藤堂

「昼休み終わるんだけど・・・」

「岡田・・・悪いわ。」

そそくさと逃げようとする島田

「あつ・・・ちょっと」

のぞみが止めようとするが島田は逃げて行った。

「じゃあ・・・」

「島田君・・・」

のぞみが言った言葉にはむなしさしか帰ってこなかった。あ・・・のぞみの心の叫びは届かぬまま、島田の姿は校舎の影に消えていった。どうしよう・・・そう思って振り向くとそこには、少しにやけた表情の藤堂が立っていた。

「何てことするの？」

のぞみは思わず言ってしまった。その言葉を聞いてしばらくのぞみの顔を見た藤堂、こいつだったら・・・いけるかもそう思い。のぞみの顔を指差した。

「今朝の事といい・・・いい度胸してるなあ」

「えっ・・・」

「名前は？」

「えっ？」

「だから・・・名前は？」

「岡田のぞみ・・・」

仕方なしに答えるのぞみ・・・岡田のぞみと聞いて、藤堂は、お見合い写真を思い出した。そして、のぞみをもう一度よく見ようと近づいた。

近づいてくる藤堂・・・な・・・何故？近づいてくるの？そう思いつつ少しづつ後ろにさがるのぞみ・・・

「な・・・なんなのよ!!」

「ふん・・・岡田のぞみ・・・か」

さらに近づいてくる藤堂・・・やがて、のぞみの背中が壁にドンと当たった。えっ？さ・・・下がれない・・・どうしよう・・・のぞみがそう思っているのと藤堂の右手が伸びてきた。思わず目をつぶるのぞみ・・・その手は、のぞみの顔をかすめバンと壁についた、

そして

「気に入った。・・・」

「えっ？」

その言葉に驚き目を開けると藤堂の顔が目の前にあった。なんなのよー！！今朝の仕返し？そう思っているのぞみに藤堂はやさしく語りかけた。

「しばらく、俺の彼女にならないか」

さいあく・・・4

い・・・今・・・なんて言ったの　確か彼女って言ったわよね・・・のぞみの思考は3秒ほど止まった。ふと藤堂を見るとち・・・ちかい・・・それもそのはず、彼の顔が目の間じかにあったからだった。そして、藤堂からの驚きの一言に思わず聞き返した。

「いま・・・なんて？」

小首をかしげているのぞみに対し藤堂は、冷静に答えた。

「だから、彼女にならないか？」

「誰の？」

「俺の」

「私が？」

そう聞き返すと藤堂は軽く頷いた。のぞみは混乱した、何言ってるのこの人、音羽さんて彼女がいるくせに・・・一体何考えてるのよ・・・と言っより、私の・・・と島田とのかを邪魔をされたことを思い出した。そして、ふうくと息を吸って

「何言ってるのよ。」

藤堂はにやりと不適な笑みを浮かべた

「彼氏もないだろう。」

あゝ頭にくる・・・のぞみは、藤堂を睨み返した。

「あんたには、関係ないでしょ!」

藤堂はフンフンと頷きながら、のぞみの顔を指差した。

「まあ・・・関係ないけど・・・でも、こんなにいい条件はないぞ。」

いい条件って・・・確かに条件はいいけど・・・音羽さんはどうするのよ・・・のぞみは、その指を持ってそれを振りほどいた

「それに、立派な彼女がいるじゃない。」

「あゝあいつか・・・あいつじゃだめなんだ・・・」

「なぜ?」

はあ・・・今なんて?・・・藤堂さん・・・あなた・・・彼女がいるのにただでさえ・・・ややこしいのに・・・しかもあの音羽さんなのに・・・彼女が今の状況知ったらどうなるのよ・・・本当に・・・

藤堂としては、いい加減に折れろよ・・・ほんと・・・!!に面倒な奴だな・・・エリじゃダメなんだよ・・・今回のことは・・・だんだんと苛々してきた。

「あいつじゃあ、駄目なんだ。」

「だから。なぜ？」

「俺がいやなんだ！！！！」

藤堂の言葉にしばらく、固まる二人、なんなのこいつ？自分の彼女が嫌なんて？のぞみは呆れた。少し大きく息を吸った。

「嫌よ！！」

「嫌とはなんだ嫌とは！」

こいつ一体・・・俺のどこが嫌なんだ？だんだんと声のトーンが上がる藤堂

「嫌なものは、いやよ。」

「そうか・・・どうしても嫌か」

「ええ・・・」

のぞみがそう言った次の瞬間、藤堂の左手がのぞみの顎をそつと持ち上げ、のぞみの唇に藤堂の唇が重なった。

「！！！！！！」

のぞみは目を見開いて硬直した。

目の前には藤堂の顔が・・・

そして、唇には感触が……

と……藤堂さんと……

キ……キスしてるの？わたし？

頭の中は、真っ白だった……

やがて唇がそつと離れ、藤堂がのぞみをじつと見つめる

のぞみは硬直し、ただ藤堂の目を見ていた。

キ……キスされた……藤堂さんが見ている……

顔が熱い……どうしよう……

そう思っていると藤堂が話しかけてきた。

「これで……いいか？」

その言葉でわれに返ったのぞみは、唇を両手で覆った。

「これで……付き合ってくれるか？」

話が言い終わる前にのぞみの右手が藤堂に炸裂した。

パチーン！！！！

「えっ？」

藤堂は、叩かれた頬を押さええのぞみを見るとその目には涙が・・・

「嫌よ！！！」

そう言つて、のぞみは、走り去っていった。

「おい・・・待て・・・」

なんなのよ・・・

もう最低・・・

のぞみはその場を去って行った。

長い夜・・・

のぞみの背中を見送る藤堂、彼女の姿がが後者の角に隠れるまで見送っていた。そして、見えなくなると叩かれた頬がジーンとしてきた。その叩かれた頬に手を当て、呆然と立つ藤堂　ふと幼い頃に注意され叩かれた時の記憶が甦ってきた。その時も理由は覚えてないが彼女の妹を泣かせた時だった。藤堂を叩いた彼女も涙に目を浮かべ

「女の子を泣かせちゃダメでしょ!!」

そう叫んでいた。そのことを思い出した藤堂・・・しばらくして、とぼとぼと歩き溜息をついた。俺は一体何をやっているんだ？ただなんとなく胸が痛い・・・そのまま学校を後にした。

教室に戻って来て、すぐさま、鞆をもって教室を出ようとするのぞみに驚いた大山と岩崎

「どうしたの？のぞみ」

「帰る。」

「どうしたのよ。のぞみ!!」

「帰るの!!」

そう言って教室を出ようとするのぞみを大山が肩を引っ張った。

「あ・・・」

振り返ったのぞみの顔を見て言葉を失った、大山と岩崎・・・のぞみの目には涙が・・・

「じゃ・・・」

ただ呆然とのぞみを見送った二人だった。

放課後、のぞみのクラスは騒然となった。それは、また、音羽がやってきたからだだった。藤堂が帰ってことを知った音羽に間が悪いことに井上がボソツと適当に言ったことが原因だった。

「藤堂さんどうしたの？」

「帰った」

「なぜ？」

「今朝のことです・・・なんかあったみたい。」

その言葉を聞いた音羽、あの娘、警告を無視して・・・キツと目が鋭くなった。そして、いつもの仲間を連れて、のぞみの部屋に向かった。

「あの娘どこ？」

突如、現れた音羽に教室はざわついた。そして、クラスの一団が音羽の行動に引いた。

「あの娘は？」

そう言つて、逃げ惑うのぞみのクラスメートの一人を捕まえた。

「あの娘、どこ行つたの？」

「え・・・ええ・・・昼休みが終つたら帰りました。」

「えっ？」

音羽は拍子抜けした。なに？！帰つたつて？どういふこと？

「本当に？」

「はい・・・」

「ま・・・いいわ・・・」

そつといい残し音羽は歸つて行つた。

それから、しばらくしてのことだった。島田がひよこつりと現れたのは、そして、大山から歸つたことを聞いて、肩を落とし歸つて行つた。

家に帰ったのぞみ、一人ベットの上で膝を抱いて泣いていた・・・もう・・・最悪・・・なんでこんなことに？島田君を巻き込もうとしたから？今朝のことを思い出した・・・このままじゃ・・・学校も追い出され、無理矢理あいつと結婚するの？ふとあのお見合い写真が頭に浮かんだ・・・あゝあゝ嫌だ！！一人抱えた膝の上に顔をこすり付けていた。どうしよう・・・嫌だ・・・こんなの嫌だ・・・そう思った瞬間、学校での藤堂光とのことを思い出した。

「俺の彼女にならないか？」

その言葉を思い出した瞬間、藤堂のドアップ・・・そして、キスを思い出した・・・思わず唇を触ったのぞみ・・・キ・・・キス・・・したんだ私・・・あの藤堂さんと・・・しかも・・・フアー・ストキス・・・唇にはあのとときの感触が甦ってきた・・・一瞬で顔が暑くなり、心臓の鼓動が激しく高鳴った。そんな時だった携帯が鳴り出したのは・・・はっと我に帰ったのぞみは、携帯をとり表示を見ると大山からだった。

「もしもし」

「のぞみー！！大丈夫？」

「うん。」

「どうしたのよ。」

「なんでもないってば」

「そう？本当に大丈夫？」

「うん。」

そう言っているのぞみだったが、目から涙が出ていた。

「ほら・・・泣いてるでしょう・・・」

「大丈夫だってば・・・」

「そう・・・じゃあ・・・のぞみが帰った後の話なんだけど・・・」

「うん。」

「音羽さんがきたの・・・」

「うん」

「でも、のぞみないからすぐ帰ったんだけどね・・・」

「うん・・・」

「それと・・・」

「・・・」

「聞いてる？」

「うん・・・聞いているよ・・・」

「島田君、来たのよ。のぞみを探しに・・・」

「えっ？」

「だから・・・島田君が来たの・・・ひょっとして、のぞみ、付き合ってるの？」

「付き合っていないわよ・・・」

「あ・・・そう・・・じゃあ・・・早く元気になつてよ」

「うん・・・ありがとう・・・」

「じゃあ・・・」

切れた携帯を見たのぞみ・・・そうだ・・・島田君を巻き込んだらいけないんだ。明日、言わないと付き合えないって・・・そこには、一人膝を抱えたのぞみの姿があった。

藤堂も一人自分の部屋でじっとしていた。そして、思わずキスをしてしまったことを思い出した。何故あんなことを・・・そう思っている、携帯がなった。音羽からだった。しばらく放置していたのだが鳴り止まない・・・仕方なくとることにした。

「もしもし・・・」

「あ・・・光？聞いてよ・・・」

音羽の甲高い声が藤堂の頭に響いてきた。

「ごめん・・・切る・・・」

そう言おうとした瞬間、音羽の話に切ることが出来なくなった。

「あの娘のことなんだけど・・・聞いてる？」

あの娘その言葉・・・岡田のことだ・・・そう思うと思わずぐつと手に力が入っていた。

「ああ・・・」

「あの娘も学校辞めるの時間の問題よ。」

「えっ？」

「だって、昼休み終ったら帰ったんだって」

「そうか・・・じゃあ・・・」

「もう一つあるんだけど・・・」

「まだあるのか？」

「実は・・・」

「えっ？」

その言葉に藤堂は我が耳を疑った……

「実は……お姉ちゃんの婚約が決まったの……」

「あ……そう……」

「ちょっと聞いてる？」

思わず携帯を下ろし、音にならないため息をついた。しず姉が婚約？……しず姉……藤堂の幼馴染でしかも片思いの相手だった。しかし、彼女は妹のエリ思いでもあり、彼女自身にとって、藤堂は弟みたいな存在だった。それをわかつていた藤堂……そして、藤堂が中学くらいになった時、彼女は従兄の隆と付き合い始めていた。だから、藤堂は気持ちを伝えることすら出来なかった。現実を突きつけられた藤堂……婚約……か……その時、再びのぞみの顔が浮かんだ……

心の整理

鳴り止まぬ目覚まし、けだるい体・・・思うように動こうとしない体、そんな状態でようやく起き上がったのぞみ・・・洗面台を前にして、真っ赤に腫れた目を見て、学校に行きたくない・・・しかし・・・行かねば・・・こうして何とか学校までたどり着き、島田の下駄箱に、メモをこそつと置き、その時を待った。

一方、音羽はのぞみが学校に来ていることを知り激怒していた。今日こそ、わからせてやるから・・・

そして、昼休みがきた。のぞみは島田が来るのを待っていた。昨日と同じ場所で・・・その頃、藤堂もいつもの礼拝堂の裏のベンチで一人考え事をしていた。しず姉が婚約・・・か・・・少し天を仰いだ、そんな時に思い浮かぶのがのぞみの顔だった。今朝も車の中で横を通り過ぎるのぞみの顔を見た。今日も暗い顔をしていた。そういえば、彼女と会ってから彼女の笑顔を見たことがないな・・・そんな時だった。のぞみの声が聞こえてきたのは・・・

「島田君・・・来てくれてありがとう」

その声を聞いて、こそつと除いた藤堂・・・あいつ・・・また、島田と会って・・・と声のする方を覗いた。のぞみは、深々と頭を下げ、しばらくして、顔を上げると島田は右手で頭をかき少しうつむいて

「俺こそ・・・ごめん・・・」

島田の意外な言葉に驚くのぞみ・・・

「えっ？」

「許してくれ・・・昨日は、藤堂が急に現れて驚いたんだ。けど・・・俺は・・・」

「島田君やめて!」

島田の話を止めて叫んだのぞみ・・・

「私こそごめんなさい・・・こんなことに巻き込んで・・・」

その時だった。のぞみはふわつと抱きしめられた・・・驚き・・・思わず目を見張った・・・島田君に抱きしめられている・・・頭に血が上っていくのがわかった。

「昨日は、ごめん・・・俺が・・・俺が悪かった・・・」

島田の声が耳元でそっと入ってきた。その言葉に思わず目をつぶるのぞみ・・・

その光景を見ていた藤堂　壁を持つ手に力が入っていた。あのやろう・・・そう思った瞬間、のぞみが島田の手を解いた。

島田に抱きしめられたのぞみ、目を閉じた瞬間、藤堂の顔が浮かんだ　　そうだからとしない　　そして、両手で島田の胸をそっと押し、彼の腕の中から抜けた

「ごめんね・・・島田君・・・気持ちはいないんだけど・・・」

「

「なぜだ・・・藤堂のせいかな?」

「うん．．巻き込みたくないの島田君を」

「岡田！！！！俺がお前を守ってやる．．．だから．．」

その言葉を聞いてのぞみはうつむいて、島田から目を反らした．．

「．．．その気持ち．．．嬉しいけど．．」

「けど．．」

「ごめんなさい．．」

「俺じゃダメなのか？」

「ごめんなさい．．」

「なぜ．．」

「．．．．」

のぞみは両手をぐっと握り締めた。キツと目を見開いていった。

「私．．．婚約者がいるの．．」

「えっ？」

「だから付き合えないの、本当にごめんなさい」

そう言っ、のぞみは頭を下げた．．．その言葉を聞いて驚く島田．．

「うそだろう」

のぞみは黙って首を横に振った。島田は、のぞみの顔を見て、溜息をつき、肩を落として去って行った。そして、ぞみに婚約者がいると聞いて驚いた藤堂は、天を仰いだ。

どうして・・・そうなるの？

1

溜息をついたのぞみ・・・

一人、たたずみ肩を落とした。

これで良いんだ　　これ以上、島田君に迷惑掛けられないもん・・・
・これで・・・これで・・・いいんだ・・・そう思っているのぞみの
心は晴れやかだった。

そして、大きく息を吸って、よしと気合を入れた時だった。

「岡田!!」

後ろからどこかで聞いた声がした。ま・・・まさか・・・

「岡田!!」

その声は、確実に近くなってきた・・・のぞみは、そつと後ろ
を振り向いて、声の主を確認した
やはり・・・思わず目をつぶり、前を向いた・・・なんで？藤堂
さんがここにいるのよ・・・

こいつ俺を見たのに無視か？藤堂は、目の前でうつむいているのぞ
みの背中を見つめ近づいた。そして、さっきのことを思い出した・・・
・「私・・・婚約者がいるの・・・」その言葉を聞いて思わず天を仰
いだ・・・その時だった・・・婚約者って事は、こいつは本気にな

ることはない・・・やはり・・・俺の彼女をやるのはこいつだ・・・
そう確信した。

肩をポンと叩かれビクツと背筋を伸ばしたのぞみは怪訝そうな顔を
して藤堂を見た。

「と・・・藤堂さん・・・」

「岡田・・・そんな顔をするなよ・・・」

「えっ？」

「昨日の件だけど・・・」

「それは断ったでしょう。」

「もう一度、考え直してくれないか？」

「え？」

その時だった学校のチャイムが鳴り響いた。藤堂は、ポンとのぞみ
の肩を叩いて

「じゃ・・・放課後、ここで」

そう言い残して、藤堂は走り去って行った。

ええ〜！！！！どういうことよ！！！！そう心で叫んでいたのぞみ、チャイムが鳴ったのも忘れしばらくその場に立ち尽くしていた。

そして、もう一人この話を聞いていたものがいた。それは、音羽だった……昨日の件って一体何よ……断ったって……どういうこと？……あの娘……許さないから……

慌てて教室に戻ったのぞみだったが、10分以上授業に遅れ、先生にこっぴどく叱られた。貴様！それでも受験生か？とか、やる気があるのか？さんざん吼えまくる先生を前に、なんでこうなるのよ！！そう思いつつも、ただ……はい、すみません……と謝り続けること5分、先生の説教から開放され、ようやく席に着くことが出来たのぞみだったが、それどこれではなかった　話って、一体なんなのよ……昨日、断ったのに……どういうこと、藤堂の言葉が頭の中を駆け巡り授業が身に入らなかった。

そして、放課後になっても、藤堂の言葉が耳から離れないのぞみが、どうしようと悩みながらさっきの場所に向かってとぼとぼと歩いていると音羽たちが取り囲んだ。

「ちょっとあなた、いい？」

中庭に連れて行かれるのぞみ……藤堂はその光景を教室から見つけた、エリの奴何をしてるんだ？あいつを囲んで……そう思いつつも、しばらく、傍観することにした
のぞみは壁の方に追いやられ、数人に囲まれた。目の前には音羽がいた。

「返事次第じゃ、ただじゃおかないわよ……」

「一体何のことよ?」

睨みつけてくる音羽を首をかしげながら見たのぞみ あなたは
一体何が言いたいの? 本当に意味がわからなかった。 呆然と見てく
るのぞみに苛立つ音羽は、両腕を組んで、さらに怖い顔で睨んだ。

「藤堂さんを横取りする気?」

両目を大きく開いて驚くのぞみは口を大きく開けた。

「はあゝ?」

どうして・・・そうなるの？

2

音羽の口から飛び出だ”横取り”と言う言葉に驚きのあまり思わず変な声を出してしまったのぞみ 今・・・横取り・・・て・・・どうしてそんなに話が飛ぶの・・・としばらく考えると・・・ひよっとして、藤堂さんの話を・・・それって、完全にまずいってば・・・とにかく逃げないと・・・そう思っていると音羽がさらに近づいてきてのぞみの顔を指差した。

「とぼけるき？」

怒りをあらわにする音羽に対し のぞみは両手で抑えてと訴えた。

「ちょ・・・ちょっと・・・どういことですか？」

「やけに親しいようね・・・」

「え」

音羽の言葉に驚くのぞみ

「本当にとぼける気ね？」

「いい加減にしてよ！！私が何をしたって言うの？」

「だから、昨日の件って何よ」

「えっ？」

「本当にあなたって人は、顔を見るだけでム力つくわ、どういう手を使ったのよ!!」

そう言つて音羽はのぞみの胸倉を掴んできた。その手をふりほどいたのぞみ

「いい加減にしてよ!!私、何もしてないわよ!!じゃあ・・・」

「待ちなさいよ!!」

そう叫ぶ音羽を無視してのぞみがその場から立ち去ろうとした時、のぞみは目の前に藤堂が立っているのを見つけ、
また、頭が痛いのが来た
うつむき左手で頭を抑えた

「藤堂さん!」

声を出す音羽を無視して、藤堂はのぞみの声をかけた。

「おい!」

その言葉に頭を軽く振つたのぞみは、ふう〜と息をして、藤堂を指差し怒鳴った。

「こんなことしたのあんたなの?」

「俺じゃないよ。こいつだよ」

藤堂は、音羽を指差した。それにたじろいだ彼女は数歩下がったが、その場から離れようとしなかった・・・

「わ．．．わたしは」

その様子を見た藤堂．．．

「悪いがはずしてくれないか．．．」

「えっ？」

「エリ．．悪いが．．．はずしてくれないか？」

「どうして？」

藤堂はのぞみを指差した。

「こいつと話があるんだ！！」

「でも．．．」

そついう音羽を藤堂はにらみつけた。

「俺の言うことを聞けないのか！！」

「わ．．．わたし．．．」

「エリ！！！！」

藤堂の言葉に慌てて逃げる音羽．．．

それを見てた藤堂は、のぞみをじっと見ていたら、後ろの方で音羽の姿がチラチラと見えた。チツと軽く舌打ちをして、のぞみの方に歩いていった。そして、通りすがりに耳元と囁いた

「1時間後、ここに来い」

「えっ？」

「じゃあ・・・」

驚いているのぞみの肩をポンと叩いて、藤堂は去って行った。

い・・・1時間後って？どういうこと？振り返ると藤堂は右手を振って去って行った。

一方、音羽は、慌てて藤堂を追いかけた。

「ごめんなさい」

藤堂はチラリと音羽の方を見た。

「俺・・・疲れたから帰るわ・・・」

「えっ？」

「じゃあ・・・」

「光・・・ごめんなさい・・・」

音羽はきゅつと藤堂の服のすそを掴んだ。それを見た藤堂は、

「わるいが・・・俺・・・疲れてんだ・・・」

「あつ・・・」

音羽が思わずその手はずしたのを見た藤堂は、しばらく考え

「エリ・・・」

「えっ？」

藤堂の言葉に、エリの顔に少し笑みが戻った

「じゃ・・・待っているから・・・」

そう言って走り去ったエリを見て、藤堂は、車に乗った。

「一時間したら戻るぞ・・・」

どうして・・・そうなるの？

3

「1時間後、ここに来い」

のぞみは藤堂の言葉を思い出していた。 来いって・・・どういう意味・・・この間の話って？ま・・・まさか・・・彼女になれって本気で言ってるわけじゃ・・・それとも行ったらいじめられるんじゃない・・・どうしよう・・・そう迷っていたが、結局、藤堂の言われた場所にいた。そして、時折携帯を開き、時間を見てはため息を付いた。そんな困惑にのぞみが苦しんでいる時をよそに、藤堂は、音羽とあるところにいた。

「光・・・今週の日曜日・・・」

「この間も言っただろう・・・用事があるって・・・」

「そう・・・」

そう言いながら・・・藤堂に本心を聞けないジレンマを抱えていた音羽の姿がそこにあった。

「じゃあ・・・帰るから・・・」

「うん・・・」

藤堂がそんなことをしていると知らずのぞみは、いわれた場所で藤堂を待っていた。そして、藤堂が目の前に現れたのはのぞみが何度目かの溜息をついた時のことだった。のぞみを見つけた藤堂は、のぞみに近づいた ち・・・近づいてくる・・・そう思うのぞみ

を尻目にしばらく見つめ再び近づきだした。のぞみが気付いた時には既に藤堂の顔が間近にあった。ち・・・近いってば・・・そう感じた時、藤堂が話しかけた。

「ところで、この間の話なんだけど、どう？」

藤堂の言葉にため息を付いたのぞみ、そして、藤堂を睨んで

「断ったでしょ。」

ぐいっと近づいてきた藤堂に思わず左手で自分の顔を隠したのぞみ・・・それを見た藤堂の顔が一瞬ふっと顔が微笑んだようにのぞみに見えた。しかし、藤堂の一言に再びのぞみは硬直した。

「もう一度、考えてみないか？」

何言ってるのよ そう思っただのぞみ

「いやよ。」

そう言っつて、目を反らした。

しばらく・・・二人の間に沈黙の時間が流れた。

その沈黙を破ったのは、二人の後ろから聞こえてきた声だった。

「^{ひかる}可愛いそうねえ光」

その声に驚いたのぞみと藤堂が振り返るとそこには素敵な女性が立っていた。誰？この人？のぞみがそう思っていると藤堂が

「なんで……しず姉^{ねえ}が……こんなところに？」

「ちよつと、用事があつてね……」

そう言つて藤堂に軽くウィンクをした。藤堂さんとこんなに親しく……それもそのはず、その女性はウィンクしただけでなく気軽に藤堂の肩をポンと叩いたのだった。それを見て驚くのぞみ……その時だった。藤堂がしず姉に声をかけたのは……

「しず姉……そういえば婚約したんだつて……」

その言葉を来たしず姉は少しかかりした表情を浮かべていた。

「なんだ……もう知っていたの？」

「ああ……」

「どうせエリでしょう……あのおしゃべりが……」

「ああ……」

会話がはずむ二人についていけずただ戸惑うのぞみ　しず姉つて誰？……藤堂さんとやけに親しそうだけど戸惑っていたのぞみだが……ん？丁度いい、今のうちに逃げようと藤堂に声をかけた。

「藤堂さん……これで」

「あ．．．ああ．．」

以外にも藤堂から精気のない返事が返ってきた。これはチャンスと
その場を離れようとした時だった。

「ちよつと！」

しず姉がのぞみに声をかけられ、びくつと立ち止まり振り返るのぞみ

「はい？」

ツカツカツカとしず姉はのぞみに近づきのぞみをじろじろと見回し
た。

「ふゝん．．．かわいいわねえ．．光は．．．妹じゃなく．．この
娘のこと好きなの？」

しず姉の言葉に驚くのぞみ．．．うそー！！！！．．藤堂さんが？．．
わ．．私のこと好きってどういうこと？そう思って藤堂を見ると反
応がない．．．

「ああ．．．」

藤堂は戸惑っていた．．．今、違うといえば．．．のぞみが．．
と思うとああ．．．と言うあいまいな返事になったしまった。

その「ああ．．」言う言葉　　のぞみとしては、一瞬何が起こ
ったかわからなかった。うそー！！！！と驚きのあまり．．
声に出なかった。い．．．今．．．ああ．．．って言ったわよね．．
．．そ．．．それって．．．ひよつとして．．．その衝撃で思わず

のぞみは硬直した。

「ふ〜ん。妹のエリとまったくタイプ違うし・・・こういうのが好きなんだ。」

妹のエリ？その言葉にエリ・・・って誰？ひょっとして、音羽さんのこと？一抹の不安がのぞみの脳裏をよぎった。

一方、藤堂にとっても、しず姉の登場は、予想外のことだった。しず姉・・・なんでこんな時に現れるんだ？それにそんなこと言ってここで否定したら・・・元も子もない・・・そう思っていると数少ない言葉で切り返すのが精一杯だった。

「別に・・・いいだろう。」

藤堂の表情を見てにやりと笑うしず姉は振り返りのぞみの方を見て話しかけた。

「あたし、音羽しずか。あなたは？」

「わたし・・・岡田のぞみです。」

「のぞみちゃんか・・・ふ〜ん」

じろじろとのぞみを見るしず姉・・・

「あ・・・あの・・・音羽さんって？」

「想像の通り、エリは私の妹よ・・・」

ええ？エリ・・・って音羽エリ？のこと・・・うそでしょう・・・ってことは・・・やばいよ・・・だって
しず姉ってエリのお姉さんって・・・さっきの藤堂さんの言葉・・・ええっ！？・・・どういっていいかわからず思わずのぞみは頭を下
げた・・・

「それでは？これで？」

のぞみは、その場を逃げた。

どうして・・・そうなるの？

4

木曜日か・・・今週は、長い・・・そう思ったのぞみ、しかし今日は9時になってもベットのの上にいた・・・そう・・・学校を休んでいた。月曜の夜に突如降って沸いた縁談を前にのぞみの母が急に服を買いに行くと言い出したのだった。それも昨日のぞみが家に帰ってすぐのことだった。

「今から行く気力はないわよ!!」

その言葉に、にっこりと微笑んだ母は、

「じゃあ・・・明日行くわよ!!」

「えっ？学校は？」

「休んじやなさいよ・・・」

「お母さん!!学校とお見合いどっちが大事なのよ!!」

のぞみの言葉に母はにんまりと笑った。その顔を見て嫌な予感がした。

「当然!!・・・お見合いよ!!」

母の一言で学校を休むことになったのぞみは、まだベットの上でのんびりとしていた。嵐のような一週間だ・・・のぞみはそう思った。お見合いの話が月曜の夜。藤堂と色々あったのが火曜日・・・そして、昨日・・・藤堂の「ああ・・・」と言う言葉を思い出し・・・あ

っ！！！思わず大声で叫んだ。

「のぞみ！！何叫んでるのよ！！」

そう言つて、のぞみの部屋に入ってきた母は、のぞみがまだベツトにいるのを見て呆れた。そして、のぞみの布団を取り上げ

「早く起きなさい！！」

こうして、のぞみは母とショッピングセンターへ行つた。しかし、のぞみの姿は、1階にあるカフェにあった。なんでつて・・・のぞみの服は早々に決まつたのだが・・・母は買い物にしばらく引きずりまわした挙句、そのカフェで待つてなさい。だつて・・・疲れきつたのぞみは、一人カフェでのんびりしていた　　ま・・・いつか・・・一人ラテを口にしたそんな時だつた。のぞみの携帯が鳴つたのは、・・・着信を見ると大山からだつた。

「もしもし」

「のぞみ！！婚約者がいるつて本当？」

のぞみは飲みかけのラテを思わず飲み込み、咳き込んでしまった。

「もしもし？のぞみ！！聞いているの？」

席が落ち着いたのぞみのは。さっきの言葉を思い出した。
婚約者つて？

「どういこと？」

「あんたが言っただけでしょう？」

「誰から聞いたの？」

「ってことは？本当なの？」

「えっ？」

「どうなのよ！！学校中あんたの噂でもちきりよ」

「ええっ！！」

思わず大声を上げたのぞみ・・・周囲が奇異な視線を感じ思わずうつむいた・・・

「ど・・・どういことよ・・・」

「だから・・・のぞみがに婚約者がいるって言って、島田君を振ったって・・・」

確かそう言ったわよ・・・でも・・・島田君ってそんなに口が軽いの？そう思っていると

「でも・・・のぞみって幸せ者よ・・・」

大山その言葉が全く意味がわからないのぞみ・・・何が幸せ物なのよ・・・学校中の噂って事は・・・どう考えても、笑いものになってるんでしょ

「島田君！！本気だつて・・・」

「はあく？」

「何、間抜けな声を揚げてるのよ・・・」

「な・・・なにが本気なのよ・・・」

「だから・・・のぞみのこと本気だつて！！」

「うそ・・・」

「嘘じゃないってば・・・あなたの嘘もばれてるし・・・」

「どういう意味？」

「婚約者のことよ・・・」

「えっ？」

「のぞみに婚約者がいないって、ばればれなんだから・・・」

「どういうこと・・・」

「あなたの弟から聞いたんだつて・・・だから・・・のぞみ・・・
あんたが藤堂さんとの件で、島田君に影響ないように身を引いたんだつて・・・超感動したつて」

「えっ？」

「島田君が！！超感動したんだって・・・」

「もしもし？聞いているの・・・のぞみ・・・」

うそ・・・どういうこと？携帯を耳から話したのぞみ・・・島田君・ひよつとして・・・わたしの言ったこと理解していないの？のぞみは、明日学校へ行くのが怖くなった・・・

一方、藤堂のところには音羽が現れていた。

「あの娘・・・今日休みらしいわね・・・」

音羽の口から出たあの娘に反応して振り向いた藤堂は、しばらく、音羽を見つめた。この様子だと・・・しず姉・・・昨日のことと言ってないな　そう思っていると見つめられていた音羽は嬉しそうにそつと肩をつついた。

「どうしたの・・・そんなに見つめて・・・」

「別に・・・」

そう言つて藤堂は目を落とした。

「それと、あの娘・・・島田君と付き合っているようね・・・」

島田とのぞみの噂は藤堂の耳にも届いていた。しかも、婚約者はいないと言つことも・・・結局、無理だったか・・・藤堂は、少し俯いた。

「らしいな・・・」

「しかも・・・あんな嘘つくなんて許せない・・・きっと島田君の気を引くためよ・・・絶対そうよ・・・そう思わない・・・」

「ああ・・・」

「だから・・・光・・・あの娘のことは、私に任せておいてね。」

「ああ・・・え？」

「じゃあ・・・任せといてね・・・」

藤堂が気付いたときには遅かった。音羽は、教室を後にしようとしていた。何を任せろって言ってた？あいつ・・・

花の金曜日？

買い物を終え、ようやく母から解放されたのぞみは、家に着くやすぐに弟の部屋に怒鳴り込んだ。

「竜馬！！！」

けたたましく響いたドアと壁の衝撃音、それと同時に入ってきたのぞみの怒鳴り声に、驚き振り向いた竜馬の首をのぞみは押さえ込んだ。

「うつ・・・」

「竜馬！！あんたって人は！！」

「な・・・なんだよ・・・おねえちゃん！！！！くっ・・・」

竜馬は、慌ててギブアップのサインを出した。しばらくして、その手を離したのぞみ

「あんた！！島田君に何言っただのよ？」

「姉貴、嫌がってたろう・・・あのおかっぱデブ・・・」

「えっ？」

竜馬の言葉を聞いて、しばらく固まったのぞみ

「姉貴の為に、言っただよ・・・」

「そう・・・」

のぞみは、竜馬を持っていた手を緩めた。そして、うつむき・・・しばらくして、溜息をついた。　　そうか・・・竜馬は・・・私の為に・・・そう思うとやがてその手を放し、

「ごめん・・・」

そういい残し、ふらふらと竜馬の部屋を出て行った。　　どうしよう・・・明日・・・部屋に戻ったのぞみの頭はそれで一杯だった。そして、ボタンとベットに倒れこんだ。しばらく考え込んだのぞみ・・・ふと・・・藤堂の顔が浮かび、それとともに・・・「俺の彼女をしないか」そして、「ああ」と言う言葉がのぞみの顔を熱くさせた。ちがう・・・とりあえず島田君に付き合えないって言わないと・・・けど　　どうやって・・・？・・・のぞみは、再び眠れない夜をすごした。

さわやかな朝の日差しが憂鬱なのぞみの寝起きを襲った。そんな憂鬱な状態と寝不足との戦いの中、のぞみは学校に向かっていた。そして、校門に着いた時、後ろから声をかけられた。

「岡田さん？」

その声思わず振り返るのぞみ・・・そこには、音羽がいた。

音羽さんが何故？私を呼び止めるの？そう思った瞬間だった。

今度は、後ろから別にのぞみを呼ぶ男の声がした。

「岡田！・・・！」

えっ？何？一体？と思って振り返った瞬間、のぞみは男性に抱きしめられた。

「岡田！！俺が守ってやる！！！」

島田君なの？

男性の腕の中で訳がわからないのぞみ・・・二人の様子にあっけに取られた音羽・・・周りは、島田の行動に沸き立っていた。その様子が見えないのぞみ　　一体何が起きているの？必死にもがいているのぞみ・・・しかし、その動きが島田にとって、うなづいているように見え力を緩めた・・・この時二人の横を藤堂の車が通過した。藤堂の目には抱き合った二人の姿が見えていた。そして、そのうちの一人がのぞみであることがわかった・・・結局、昨日、音羽が言った通りだったが・・・しばらくして藤堂はため息をついた。

ようやく腕の中から開放されたのぞみ・・・目の前には島田が・・・数十人に囲まれていた。やがて、その人たちから「おめでとう」と言った声が上がってきた。その光景を見て　　うそでしょ・・・思わず顔が真っ赤になって教室へ走って逃げていった。

教室へ着くと、大山と岩崎が駆け寄ってきた。

「のぞみ！！やったね！！」

のぞみは、ある種熱烈で少し嫉妬が入ったような歓迎を受けた。

もう限界だ・・・のぞみがそう思ったのは4限目の授業の最中だった。これが終わったら帰ろう　　そして、終了のチャイムが

鳴るのを待った。

のぞみが待ちに待った授業を終了するチャイムが鳴った。その瞬間に立ちあがり鞆を持ったのぞみはすぐに教室の後ろの出口に向かった。

「のぞみ・・・どこ行くの？」

そう言う岩崎に向かって

「家に帰る。」

「ちょっと待ってよ」

大山がのぞみの手を引いた。振り返ったのぞみは

「昼から用事があるの・・・」

そう言っただ山の手を振り切り、教室を脱出することに成功した。しかし、のぞみにとってもう一つ厄介なことが残っていた。それは、島田が昼休みに例の場所に来いと言っていたことだった。その場所へ来たのぞみ　断らないと・・・その気持ちで一杯だった。どの位時間がたったのだろう・・・そこへ島田が現れたのは、昼休みが残り10分くらいのときだった。・・・彼はのぞみをじっと見つめ、そして、

「岡田・・・今度の休みデートでもしないか？」

すっかり、自分の彼女になったと思い込んでいる島田・・・のぞみは、はつきりと言った。

「ごめんなさい・・・」

「土日どっちもダメか？」

「ごめんなさい・・・家の用事があるから・・・」

「そつか・・・？」

島田は右手で自分の後頭部を少し搔いていた。

「ところで島田君・・・」

そんな島田を見ていたのぞみ　　今しかない・・・今しか・・・
そう思い、思い切って言おうとした瞬間だった。チャイムが鳴り響いた・・・

「あつと・・・時間だ・・・行かないと・・・じゃあ・・・今度落ち着いたら・・・」

島田は慌てて教室に戻って行った。その姿を見送って、ため息をついたのぞみ　　しかたない・・・来週に言おう・・・そう思って校門の方へ向いたら目を見張った。そう、のぞみの目の前に藤堂が立っていたからだった。

藤堂は、のぞみがこの場所に来た時からの一部始終を見ていた。

こいつ結局、島田とか・・・チャイム鳴ったし　　教室に戻ろうとするのぞみが振り向いたので藤堂は思わず立ち止まった。藤堂の前には驚いた表情ののぞみがいた。　　な・・・なんで

ここに藤堂さんがいるのよ．．．藤堂はのぞみの表情を見て思わず微笑んだ。

「お前．．．あいつと付き合っているのか？」

「うつんうつん．．．」

首を横に振ったのぞみ　付き合っているのか．．．その言葉が何故かのぞみの心を曇らせた。

「どういうことだ？」

「ごめんなさい．．．わたし．．．彼とは．．．つきあえない．．．」

「付き合えないって．．．」

「島田君に、これ以上、迷惑掛けたくないの．．．」

「そうか．．．そんなにあいつのことが好きなんだな．．．」

藤堂の言葉を聞いたのぞみ、気付くと目から涙がこぼれた．．．あれ？噂通りの行動をとるのぞみを見た藤堂は呆れたがその目からこぼれた涙を見て驚いた。

「ごめんさい．．．」

うつむき少し涙を堪えながら話すのぞみの口から自然とこの言葉が出てきた。なんども何度も．．．
そんなのぞみを見て、藤堂は思わず抱きしめてしまった。しばらく、

彼の胸の中で泣いていたのぞみ・・・やがて、藤堂の胸をそつと押し、鼻をすすりながら離れ・・・のぞみは顔を見上げた・・・

「大丈夫か？」

藤堂が声をかけると無言で頷いた。しかし、のぞみはその場所を離れることが出来なかった。そんな時だった。のぞみの携帯が鳴った・・・そして、やっとわれに帰ったのぞみ。

「藤堂さん・・・本当にすみませんでした・・・」

慌ててその場から走り去って行った。

帰りの電車の中、のぞみは気付いた・・・藤堂のことが好きなんだと・・・でも、決して口に出してはいけないんだと・・・

のぞみの後姿を見送った藤堂・・・腕の中にはのぞみの感触が残っていた。じつと手を見つめ、溜息をついた。あいつは、島田のことが好きなんだと・・・そう思うと見つめていた手に力が入っていた。まさか・・・おれが？そして、もう一度、あいつは、島田のことが好きなんだと自分に言い聞かせた。

お見合い・・・1

日曜日、のぞみの姿はホテルの前にあつた・・・財閥の御曹司だし、受けようか？あのおかっぱデブの藤堂光・・・生理的には無理・・・逃げたい・・・けど・・・これしかない・・・島田君のことけじめをつけるには・・・そして・・・藤堂さんを・・・あきらめるには・・・両親に連れられ指定された部屋に入った。しかし、母の勘違いで一時間も早く着いていた。しばらくして席を立ったのぞみ

「どこへ行くんだ？」

「ちよつと・・・」

「ちよつと？」

「トイレ・・・」

「すぐに戻って来いよ。もうすぐ来るから。」

「わかつたわ・・・」

トイレの洗面で鏡に映る自分の姿を見ていたのぞみ、ここまできたら・・・もうやるしかない のぞみは大きく息を吸い自分に気合をいれた。そして、トイレから出るとそこに藤堂の姿を見つけた。と・・・藤堂さん？思わず見とれたのぞみ・・・

「岡田・・・」

「あつ・・・」

藤堂が近づいているのにのぞみは気が付いて逃げようとしたが手をつかまれた。

「何故？ここに？」

「藤堂さんこそ・・・」

慌てて目をそらしたのぞみは俯いた。しばらくして、二人の姿は近くのソファ―にあった。俯いて座っているのぞみの目の前でため息を付いた藤堂

「こんなところで岡田と会うとは・・・」

「ええ・・・」

チラッと藤堂を見たのぞみは再び俯いてしまった。 な・・・
んで藤堂さんがここに？目の前に座っている藤堂をチラチラ見
た。そんな時だった。

「どうしてここにいるんだ？」

「えっ？」

のぞみはしばらく考え込んだ。そして、事実を言おうと決意した。

「実は、今日、お見合いなの・・・」

「お見合いって・・・じゃあ・・・婚約者の話って、本当だったの

か。」

黙って頷くのぞみ・・・藤堂はその悲しそうな顔をじっと見つめていた。俺と同じ奴がここにもいたのか・・・しかも、こんな近くに・・・視線を上げると藤堂がじっと見てるのに気付いたのぞみ

「ど・・・どうしたの？そんなに見つめて・・・」

そんな時だった。藤堂はぼそつと呟いた。

「実は・・・俺もなんだ・・・」

「うそ・・・」

「嘘じゃないんだ・・・」

のぞみは、今までのことを思い出した。それって・・・今までのことって・・・ひょっとして、私と同じことを考えていたってこと？

「えっ？じゃあ・・・付き合ってくれて言ったのは？」

藤堂は、溜息をついて・・・

「ごめん・・・」

やっぱり・・・そうだったんだ・・・けど・・・

「そんなに嫌いなのか？」

「えっ？」

「その・・・見合い相手・・・」

「ああ・・・」

ああ・・・で、藤堂さんって言うって財閥の御曹司だからそれなりの人なんだろう？私と違ってそう思ったのぞみは、思わず口に出してしまった。

「どうして？」

その言葉を聞いた藤堂、再びため息を付いて、頭を2、3回振って言った。

「あれのどこが俺の見合い相手として相応しいんだ？」

「あれがつて？」

「28才で聞いたけど、写真を見ると太目のおばちゃんだぜ・・・」

藤堂は、言い終わると又ため息を付いて、俯き両手で頭を抱えた。

えっ？それって・・・そう思うと自分もそうだったと思い出したのぞみは、お見合い相手の愚痴を言い始めた。

「私も聞いてよ・・・ひどいのよ・・・お見合いの相手は28才らしいんだけど。デブでおかっぱで、どう見ても40台以上よ。どう思う？」

のぞみの言葉を聞いた藤堂 今、なんていったんだ？岡田も
ひよっとして気の進まないお見合いをするのか？フト顔をあげのぞ
みを見ると両手で頬杖をして、ふうーっと軽く息を吐いていた。

「えっ？岡田・・・今なんて言った？」

「だから、おかっぱデブのおっさんなの・・・」

「そうじゃなくて」

「じゃあ・・・なんなのよ」

のぞみは、思わず目を反らせた・・・やっぱり言っんじゃないかった。
・・・なんでそんなに聞くのよ
そう思っている時に、まさに凶星と言える言葉が藤堂の口から胸に
刺さった。

「嫌なんだろう・・・」

「まあ・・・そうだけど・・・」

徐々に声が小さくなるのぞみは、再び俯いてしまった。その時だっ
た。藤堂が急にのぞみの横に座ってきた。 なぜ？そこに座る
のよ・・・驚くのぞみを尻目にのぞみの手をとって握り締めた。

な・・・何がしたいの？藤堂さん？驚くのぞみの名前を呼んだ・・・

「岡田・・・」

「な．．なによ．．」

「だったら．．俺が彼氏として、一緒に行ってやるよ。」

「えっ？」

「だから．．俺達．．付き合ってることにして．．」

のぞみはようやく藤堂の言っている意味がわかった。

「あっ！！」

「あとでお前が一緒に来てくれるか？」

「うん。わかったわ。」

気がついたらのぞみもその手を握り返していた。

「あ．．．」

思わず手を離す二人

「まず、岡田の方から行くか．．」

「うん．．」

こうして、藤堂は、父親に30分ほど遅れると伝えた後、一緒にのぞみが見合いをする部屋に向かった。

ドアの前に立つのぞみ　これで変わるかも・・・絶対うまくいく・・・そう信じ、心臓が高鳴るのぞみは藤堂と並んで立っていた。そして、藤堂の方を見て思わず彼の左手をぎゅっと握っていた。その手を気付いた藤堂は、のぞみのほうを向いた。

「こここの部屋か？」

「そうよ。」

二人はお互い頷き、そして、中に入って行った。中央にあるテーブルを境に右側にのぞみの両親が座っていた。しかし、まだ、相手方が誰も来ていなかった。　　どうということ？と思いつつ、藤堂を見る

「どうということだ？」

のぞみの耳元で呟いた。

「まだ来ていないみたい・・・」

ドアの音を聞いて、母親が話しながらのぞみの方を見た。

「のぞみ戻ってきたの、早く座って・・・」

すると、のぞみ横に立っている藤堂の姿に気付いた

「この人は？」

のぞみと藤堂が顔をあわせ頷いた。そして、話そうとした時だった。二人の後ろから、ぶつぶつ言いながら一人の男が入ってきた。

「光の奴・・・30分も遅れるって・・・どういうことだ?」

その声を聞いて驚き振り返る藤堂　藤堂さんどうしたの?そう焦るのぞみも藤堂の視線の先に眼をやった。そして、藤堂の口からとんでもない言葉が入ってきた。

「お・・・親父・・・なんでここに?」

お・・・親父って?どういうこと?のぞみが考える暇もなく、その人の口からのぞみの耳を疑う言葉が発せられた。

「そりゃあ・・・お前のお見合いと言うか婚約者に合わせるためだよ・・・」

「えっ?」

思わずのぞみと藤堂は顔を見合わせた。　うそー!!--!!どういうこと?藤堂光って目の前の藤堂さんなの?って藤堂さん自身も驚いた顔をしているし・・・どうなっているの?

藤堂も親父の言葉を信じられないでいた　うそだろう・・・岡田のぞみって・・・こ・・・こいつなのか?

お見合い・・・2

ほんの少し前まで、自分達の未来を信じ、強く握られていた手は、藤堂の父の一言で、一瞬で離れ、驚きの表情でお互いを見つめ合う二人・・・・・・・・どういうこと？のぞみは現状が理解できずにいた。そんな時、二人は藤堂の父に肩を押された。

「立ち話も何だから、まあ座りたまえ。」

こうしてのぞみと藤堂のお見合いが始まった。

向かい合う様に座らされた二人、その横にはにこやかな顔をして座る親達の姿があった。――どうなってるのよー一体！！そう叫びたいのぞみは、ふと顔をあげると目の前の藤堂の顔を見て驚いた。――あの顔、怒ってるわ・・・私、知らないって・・・小刻みに顔を横に振るのぞみ、その様子を見た藤堂は、ただ溜息をし俯いた。――藤堂さん・・・溜息して・・・うゝ・・・ついさっき迄までのあれは、何だったの？ひょっとして？のぞみは、両親の方を向いたら、慌てて目をそらした。横にいる母を肘でつついた。

「な・・・何よ」

「知っていたの？」

「知らないわよ。私も今聞いて驚いてるのよ。けど、良かったじゃない。」

「何が？」

「あのオカッパデブじゃなくて、イケメンで」

のぞみの母は、そう言うのと逆にのぞみを肘でつつきかえした。――お母さん他人事でしょう・・・そう言う問題じゃないってば！そんなのぞみをよそに、藤堂の父は、右手をあげこう言った。

「そろそろ、良いかな？はじめても」

きやく始まっちゃう・・・のぞみが頭を抱えた時だった。

「親父、写真と違うんだが」

と・・・藤堂さん、そうだ私も違うんだ。

「私も違うんですけど」

藤堂の父は、二人を見て、にやりと笑みを浮かべた。

「ちょっとした、手違いがあつたようだな、それとも、あの写真の相手と見合いするかね？」

「えっ！・・・いえ！それは・・・」

慌て首を横に振る二人・・・な・何てこと言うのよ！！そう思ったのぞみだったが・・・

「では、」

藤堂の父が話を進めとしたい時だった。――このままじゃ・・・そう思ったのぞみはもう一つの疑問をきいた。

「写真の手違いだけならわかるけど、何故年齢まで、違うんですか？」

のぞみの言葉に暫く考えた藤堂の父、右手を顎にあて、しばらく、のぞみを見つめた。そして、のぞみの父をチラリと見た。

「元気の良いお嬢さんだ、いい娘を持ったな、岡田、」

その言葉に黙って頷くのだのぞみの父、さらに藤堂の父は、続けた。

「ご想像の通りだ、同じ学校と聞いて、そうしたんだがなにか？」

「それは何故？」

「この縁談をうまくいかせるためだ。ただ、それだけだ。」

のぞみは、大きく息をした。――んーなんて逃げ方、どうしよう・・・これしかない。

「けど、いきなり会って結婚は、あんまりすぎませんか？」

「何が？だいたい、お見合いってのは、そんなものだろう。」

平然と話をした藤堂の父が、手にしたお茶を口にしようとした時、のぞみが立ち上がり

「ですから、まだ高校生だし、いきなり結婚なんて、」

その言葉を聞いた藤堂の父は、ニヤリとして

「君達の年齢なら、親達の同意があれば、結婚できるから心配無用だ。そうだな、岡田」

「はい、」

父の返事を聞いたのぞみは驚いた。しかも、さらに、追い討ちをかけるようなことを母が言った。

「いいじゃないのよ、折角の縁談なんだし、お金持ちでイケメンじゃない、一体何が不満なの」

にこやか話す母、その言葉を頷いて聞いている藤堂の父・・・

「お母さん!!」

のぞみがそう言う藤堂の父が

「わしも悪い縁談じゃないとおもぅが」

そんな光景を見て――いい加減にしてよ。問題はそこじゃないってば、叫び声を上げたいのぞみだったが必死に堪えてこつ言った。

「ですから、私が言いたいのは、そんなことじゃなくて」

「じゃあ・・・一体何なんだね」

「私・・・藤堂さんのことよく知らないし・・・それに・・・いきなり結婚と言われても・・・」

その言葉にしばらく黙った藤堂の父・・・飲みかけていた湯飲みを机のおいた。そして、腕を組んでのぞみをぎろりと見た。

「ふむ・・・時間・・・か・・・」

そんな時に横から母が余計なことを言った。

「何言ってるのよ、さっき、あなた達すごく仲良さそうだったじゃない、手を握り合っちゃって・・・」

母のこの何気ない一言はのぞみを凍らせた――な・・・なんて事いうのよ・・・

「お母さん!!」

「まあまあ・・・のぞみさん、そんなに光のこと知りたいのなら、この後二人でよく話し合ったら良いじゃないか。なんなら・・・今晚このホテルで光と泊まるか」

こ・・・このお父さん、いきなり何言つんですか？こ・・・怖すぎる藤堂さんのお父さんは・・・とうとうのぞみは思わず叫んだ、それと同時に藤堂も叫んだ

「チョット待ってくださいよ」

「親父!!!!」

「まあまあ」そう言いつつ藤堂の父は、

「時間・・・か・・・確かにその通りだ」

そう言つて指を二本たてた手を突き出した。

「二カ月・・・二カ月をやるからお互い親交を深めるように・・・では、始めてもいいかね・・・のぞみさん」

「でも・・・」

のぞみが言おうとした瞬間、バンと机を叩いてのぞみをギロリと睨んだ

「いいですよね」

「はい・・・」

お見合い・・・3

結局、藤堂の父親に押し切られお見合いは始まった。のぞみは、ただ俯くしかなかった。もー最悪・・・とうとう始まってしまった・・・と言うことは、結局2カ月後に・・・婚約って？・・・ん？・・・ま・・・まさか？わたし？藤堂さんと・・・ふと視線を上げて藤堂の顔を見た。きれいな顔をして思わず見とれてしまいそうになった。だって、今まで・・・遠くで見つめていた存在が目の前に急に現れた。しかも婚約者として・・・そんなことを考えていたのぞみをよそに藤堂の父はお見合いを進めていた。

「それでは、お互い同じ学校と言うことで自己紹介をしてもらおう。まず光から・・・ん？」

藤堂は俯いていた。さっきまでは、一体・・・チラチラと数度となく視線を上げのぞみを見ていた。

「光！！」

「えっ？なんだよ親父・・・」

「自己紹介？」

「は？今更？」

「いいからしろ」

しろって言ったって意味ないだろう・・・父親の方を睨む藤堂

「早く!!」

「はじめまして・・・藤堂光です。・・・」

俯きばーつとしているのぞみの様子を見た藤堂　　ほら見る聞いてねえじゃん・・・親父の方を見た。流石の親父ものぞみの様子がおかしいのみ気付き声をかけた。

「あゝ？のぞみさん？」

その様子を見て痺れを切らした母親がのぞみを肘でつついた。

「のぞみ・・・」

いきなりつつかれたのぞみは、母親の方を見た。　何？お母さん？急につついて？と母親の方を見ると「自己紹介するの！」と藤堂たちの方を指していた。　　どういうこと？ふと顔を上げると藤堂の父親が話かけていた。

「よろしいですか？のぞみさん？」

は・・・始まつてゝ！！どーしよう・・・のぞみは焦った。

「す・・・すみません・・・」

「いいから・・・お名前を・・・」

「お・・・岡田のぞみです・・・」

な・・・なんてぎこちない自己紹介だ・・・思わず噴出しそうになる

藤堂・・・

あゝやだやだ！！声うわずちゃた・・・こんな恥ずかしいよゝ再び、俯くのぞみ・・・

そして、二人の間に、沈黙が流れた。

ほら親父・・・話すこと無くなった・・・藤堂は、耳まで真つ赤にして俯いているのぞみの方を見た。しばらく沈黙をする二人・・・藤堂の父親が痺れを切らして・・・藤堂に耳打ちをした。

「趣味でも聞け・・・」

「趣味？聞いても意味ないよ。」

「いいから聞け・・・」

藤堂はため息をついて、父親を見ると早くと即していた　仕方ない・・・藤堂

「ご趣味は？・・・」

俯いて沈黙するのぞみ　しゅ・・・趣味って？えっと・・・のぞみは何も考えることなく答えた。

「趣味は空手です。」

これを聞いて、母親は思わず・・・のぞみの尻をつねった。

「痛っ・・・」

母親をにらむのぞみ

「ほうう・・・空手を・・・」

関心したのは、藤堂の父親だったが、息子が関心を示さないのを見て

「くら・・・」

か・・・空手だ？本とに変な奴だな？そう思っていた藤堂は親父に即され変な返答をした・・・

「あつ・・・」

あ・・・またやってしまった・・・どうしよう？早く終わってよう！！ただ俯くしかないのぞみ・・・こうしてまた、沈黙が始まった。そんな時だった。今度は母親がのぞみに耳元でささやいた。

「聞きなおすの？」

「えっ？なに？」

「だから聞きなおすのよ」

「何を？」

お母さん・・・聞きなおすって何を？のぞみが母親の方を見ると

「もう・・・いいから・・・聞きなおしなさい・・・早く！！」

聞きなおすのね・・・本当に？・・・よし・・・半信半疑のぞみは、

「なんですか？」

「・・・」

「ぷっ」

のぞみが辺りを見回した瞬間、思わず目を瞑った。 な・・・何が聞き直すだけなのよお母さん・・・藤堂さん・・・笑うのこらえているし、どうしたらいいのよ・・・そんな時に母親がのぞみの尻をつねった。

「イタっ・・・何よ。お母さん」

「趣味を聞きなおすの？」

早く言ってよ・・・お母さん・・・もうっ!!

「あの〜趣味は？」

笑いを必死に堪えていた藤堂は何とか答えた。

「・・・ない。」

「じゃー」

こうして、延々とかみ合わない会話が続いた。

しばらくして、藤堂の父親が

「じゃあ、後は、二人で・・・」

「いや、威勢のいい、お嬢さんで・・・」

「いや、お恥ずかしい。」

「いいじゃないですか・・・」

のぞみと藤堂の両親が話をしてながら出て行った。

お見合い・・・4

部屋に残され俯く二人　　うゝやってしまった・・・ただ俯いているのぞみをじっと見ていた藤堂が思わず笑い出した。

「くつくつく・・・」

「な・・・何笑っているのよ・・・」

顔を真っ赤にして、怒るのぞみ・・・

「なんですか？はないだろう・・・なんですか？は・・・」

「あ・・・あれは、お母さんが・・・」

もう・・・藤堂さんは笑い続けてるし・・・どうしたらいいの。そう思っていたら、ふうくと藤堂が大きく息をするのが聞こえてきた。思わず顔をあげると視線が合い、ふと我に戻った二人・・・

「あ・・・」

気まずい空気が二人の間に流れた・・・

まさか、こんな展開になるとは、のぞみが溜息をつくと同時に藤堂も溜息をついていた。そして、藤堂が背もたれに体重をかけぼつりと言った。

「なんなんだゝ。一体？」

「本当よ・・・最初から・・・」

のぞみは言おうとは思わずとめた。

「最初から？」

藤堂が聞き返す

「あ・・・いや・・・」

目をそらし言葉を濁すのぞみ　　言えるわけじゃない・・・というより・・・ほ・・・本当に付き合っの私達・・・そんなことを考えているのぞみをよそに藤堂は話はじめた

「本当にだまされたよ」

そう言って、藤堂は目の前にあるコップに手をした。

「そう思わんか？岡田・・・」

「確かにそうだけど・・・」

「けど？って・・・どうした？」

のぞみが声をかけると藤堂は視線をのぞみに向け話しかけてきた。

「どっつて？」

「さっき・・・けどって・・・」

「あ・・・うん・・・これから？」

「これからって？」

「これから・・・？」

いけない・・・これを言うては・・・思わず付き合うの言
いそうになったのぞみ・・・慌てて口を押さえた。その様子を見て
藤堂は「どうした」と声をかけた。

「あ・・・いや・・・」

言葉を濁すのぞみ・・・そうよ・・・最初からわかっていたらこん
なことにならなかったのに・・・ふと藤堂を見た。絵に描いたよう
なイケメン・・・それに金持ち・・・非の打ち所がない・・・そう
思っていたらこの間・・・唇を奪われたことを思い出した。思わ
ず唇を手でなぞっていた。

そのしぐさに、藤堂もあることを思い出した。　　そういえば、
キスしたんだよな・・・あの時、何故キスしたんだろう・・・そ
う思いつつばーっとのぞみを見つめていた。

藤堂の視線に気付いたのぞみは、少し引いた・・・

「な・・・なによ・・・」

「いや・・・べつに・・・」

あ・・・もう耐えられない・・・のぞみは、すっと立ち上が
った。

「おい。」

いきなり立ち上がったのぞみを見て驚き声をかける藤堂

「なに？」

立ち上がり振り向いたのぞみ

「なにつて・・・岡田。どこへ行くんだよ。」

「ここでじつとしてても仕方がないでしょう。」

「それもそうだな・・・」

「じゃあ、出ましょう。」

二人は、その部屋から出て、しばらく、ロビーを歩いた。

「どこか、喫茶店みたいなところでもないの？」

「ああ、確かレストランがあつちに。」

のぞみに振り回される藤堂　　「たたく、一体なんだったんだ。」

レストランに入った二人は向かい合って座った。しかし、のぞみは窓の方をジッと見つめていた。　　「とりあえず落ち着かないと・・・」

飲み物が来るまでの間、二人に会話はなかった。そして、痺れを切らして声をかけたのは藤堂だった。

「おい・・・」

のぞみはちらりと声のするほうを見たがすぐにその視線を外へ向けた。

「何か言えよ」

藤堂の言葉によつやく反応したのぞみ　　な・・何から話そう・・
・そう戸惑っていると、お見合いが始まる前のことを思い出していた。

「岡田・・・」

「さっきは・・・ありがとう・・・」

「えっ？」

アイスコーヒーを一口飲んだのぞみ

「私の彼氏役を買ってくれて・・・」

「あ・・あれね・・・」

「けど・・・」

のぞみはそういつと俯いて黙ってしまった。

「けど・・・」

「・・・・・」

「けど・・なんだよ・・」

のぞみは心の中で呟いた。あの時何故キスしたの？・・・今日のお見合いが嫌なだけだったから？そう思うと次の言葉がでない。

「・・・・・・・・」

「黙っていたらわからないじゃないか。」

のぞみは視線を上げ藤堂をじっと見つめた。

「けど・・・なぜ・・・あんなことをしたの？」

「あんなことって？」

「月曜・・・」

そついうとのぞみは視線を落とした。

「あ・・・あれは・・・」

あ・・・あれは・・・あのことを思い出す藤堂・・・何故キスをしたかつて？藤堂も戸惑っていた実は、あの時思わずキスしてしまったのだった・・・困惑した表情を浮かべていた。

「どうしたの？」

「ああすれば・・・お前が彼女を引き受けてくれると思って・・・」
のぞみは急に立ち上がった。

「かえる!!!」

そう言つて、レストランを出て行つたのぞみを呆然と見送る藤堂
今なんつて?か・・・かえるつて?・・・藤堂は慌ててのぞみを追
いかけた。

「ちょ・・・ちよつと!!!岡田」

しばらくして、のぞみに追いついた藤堂は、のぞみの左肩に手を置
いた。

「待てつてば・・・」

パチーン

のぞみは振り返りざまに藤堂の顔を叩いた。

藤堂は今、何が起きたかわからなかった。しばらくして、左の頬が
ジーンとし、頬に手をやるとのぞみの目を見て驚いた・・・目に涙
を浮かべていた。その目を見て動けなくなつた藤堂・・・のぞみは、
藤堂を置いて、ホテルから出て行つた。最低・・・なんて奴
なの?・・・私のファーストキスをなんだと思つてゐるの?あの言
葉が・・・あの・・・お前が彼女を引き受けてくれると思つて・・・
藤堂の言葉がのぞみの胸を裂いた。どの位走つたのあろうか、のぞ
みは、さっきのことを思い出し、俯き足を止めた。その時だつた

「おかだ・・・」

自分を呼ぶ声に驚くのぞみ・・・目の前には、島田が立っていた。

「島田君？」

「どうしたんだこんなところで・・・」

のぞみの顔を見て驚く藤堂・・・

「な・・・泣いているのか？」

のぞみは慌てて目のあたりをこすり・・・

「大丈夫・・・なんでもない・・・」

そう言おうとした時、ふつと目の前が暗くなった・・・島田がのぞみをそつと抱きしめていた・・・

「そんな事言うな・・・俺が守ってやるから・・・」

島田の腕の中で　このまま・・・ここに居たい・・・けど・・・
やっぱりダメ・・・そう思ったのぞみは、島田の胸を押し、腕の中からでた。

「だ・・・大丈夫だから・・・」

しばらくして、二人の姿は、近くのベンチにあった。

「本当に、大丈夫か？」

「うん・・・」

「でも・・・どうしたんだ？」

「なんでもない・・・本当に大丈夫だから・・・」

その時だった。のぞみの携帯が鳴った・・・相手は母だった。

「ごめんなさい。もう・・・もどらないと・・・」

「そうか・・・だいじょうぶか・・・」

「うん・・・」

「岡田のこと・・・俺が守ってやるから・・・」

「そ・・・それは・・・」

「いいから・・・」

「そうじゃなくて・・・」

「どうしたんだ？」

「これ以上島田君に迷惑掛けられないの。だから・・・」

「藤堂のせいかな？」

「そうじゃなくて・・・」

その時だった・・・再び携帯が鳴った。

「早く行けよ・・・じゃあ・・・」

そう言つて島田はのぞみの肩をポンと押した・・・しかたなく、ホテルに向かつて走り出したのぞみ　　島田君のこと何とかしないと・・・

のぞみを追いかけていた藤堂は、のぞみが島田に抱きしめられている瞬間を目撃していた　　そっか・・・あいつはやはり島田のことが好きなんだ・・・藤堂が二人の姿から視線をそらし、ホテルの方へ振り返つた目の前にしず姉がいた・・・

「光・・・」

「しず姉・・・」

「どうしたの？そんな顔をして・・・」

「別に・・・」

そう言つて、ゆっくりと歩き出した藤堂、しず姉にも・・・藤堂の後ろでのぞみが島田と抱き合っている光景が見えた。

「あ・・・」

しず姉の声に足を止めた藤堂・・・

「なんだよ・・・」

「かわいそうに・・・」

そう言つてしず姉は、藤堂の腕を組んだ。

「し．．．しず姉．．．な．．．なにを．．．」

しず姉はにつこりと笑顔を見せて、藤堂の顔を人差し指でつんとつついた。

「せつかく、慰めてあげているのに．．．」

そう言つて、今度は肩を組んできた。

「こんなことしていると．．．隆兄いに嫉妬されるよ」

「大丈夫よ．．．光は私の可愛い弟だから．．．」

「かなわないなあ．．．」

会話をしながら二人は、ホテルへ歩いていった。

「ここなの？」

「ああ．．．」

「じゃあ．．．ここで別れね．．．」

「しず姉．．．さっきはありがとう．．．」

しず姉はそつと藤堂を抱きしめた．．．

「何言つてゐるの・・・可愛い弟よ・・・がんばれ・・・」

そう言うとしず姉は、離れて、手を振つて去つて行つた。

ちようとホテルへ戻つて来ていたのぞみは、この光景を目の当たり
にしていた。 あの人と・・・あんなに親しそうに・・・私が
入る隙間なんて・・・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2818z/>

USOよね・・・

2012年1月5日23時49分発行